2019年4月14日（日）「内から外へ」

マタイ 23:23-28

23 わざわいだ。偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは、はっか、いのんど、クミンなどの十分の一を納めているが、律法の中ではるかに重要なもの、正義とあわれみと誠実を、おろそかにしているのです。これこそしなければならぬことです。ただし、十分の一もおろそかにしてはいけません。24 目の見えぬ手引きども。ぶよは、こして除くが、らくだは飲み込んでいます。

25 わざわいだ。偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは杯や皿の外側はきよめるが、その中は強奪と放縦でいっぱいです。26 目の見えぬパリサイ人たち。まず、杯の内側をきよめなさい。そうすれば、外側もきよくなります。

27 わざわいだ。偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは白く塗った墓のようなものです。墓はその外側は美しく見えても、内側は、死人の骨や、あらゆる汚れたものがいっぱいです。28 そのように、おまえたちも外側は人に正しく見えても、内側は偽善と不法でいっぱいです。

【序論】

私たち人間はよく「自分のことは自分が一番よく分かっている」という風に言います。そこには確かに真実があるかも知れません。自分は何をしたいのか。何をすると気分が良く、何をすると気分が悪いのか。自分の感覚を基準に物事を考えるとき、そのような一つの答えを持つことができるかも知れません。一方、私たちは自分のしていることがよく分からない面があります。自分の心の奥底の思い、自分の向かっている方向性。心の状態。そして、私たち信仰者におきましては特に神との関係。それが良い状態にあるのか、はたまた悪い状態にあるのか。神との関係が見えなくなってしまう。しかし、当事者にはその理由がなかなか分からないのです。ロイドジョーンズは『霊的スランプ』という本の中で、次のように述べています。「すべての霊的スランプの究極的な原因は不信仰にある。もし信仰が確立しているならば、悪魔といえども何ら手出しができない。私たちが悪魔の前に倒れ、その攻撃に屈するのは、神に聞き従う代わりに悪魔に聞き従うからである。」(p. 29) 「この霊的スランプという課題における最大の問題点は、ある意味において、私たちが自己に向かって語る代わりに、自己が語るのを放置している点にある。」(p. 30) この本の著者は、悪魔の声はもちろん、自分自身の声にさえ気をつけよと言っているのです。私たちが日頃耳を傾けているのは誰の声か。神か。自分か。はたまた悪魔か。自分の霊的状态を調べ、聞くべきところに立ち返りたいと思います。

【本論】

今日は三つの「わざわい」を一つのまとまりとして扱います。今日の三つの「災い」には「思い違い」というテーマがあるでしょう。パリサイ人・律法学者の陥っている状態は深刻です。自分では誠実に神に仕えていると思っているし、実際に生活の多くの部分を神のためにささげてはいる。ところが、それが主イエスに「偽善」と呼ばれるほどに「無意味」、もっと言えば「有害」なものにさえなっているからです。

本論 1. 献げ物の本質

わざわいだ。偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは、はっか、いのんど、クミンなどの十分の一を納めているが、律法の中ではるかに重要なもの、正義とあわれみと誠実を、おろそかにしているのです。これこそしなければならぬことです。ただし、十分の一もおろそかにしてはいけません。(23:23)

収入あるいは収穫の「十分の一」を神に献げるという規定は、旧約聖書の幾つかの箇所に基づいています。最初にこの割合が出てくるのは創世記 14 章で、アブラハムがシャレムの王メルキゼデクに戦利品の十分の一をささげたという箇所です。これが基礎となって、後に律法の中で農産物と家畜の十分の一(レビ 27:30-33、民数 18:21-26)、収穫物の十分の一(申命 14:22-27)を主にささげるよう定められたのです¹。

こうして地の十分の一は、地の産物であっても、木の実であっても、みな主のものである。それは主の聖なるものである。(レビ 27:30)

この献げ物の意味するところは、自分の収入がすべて神からの預かり物であることを表す「忠実」のしるしでした。そして、それが結果として祭司・レビ人のようなイスラエル宗教を担う人々の生活を支えるものとなったのです。

現代のキリスト教会にも「什一献金」という基本理念があり、私も幼少の頃から教えられてきました。子どもの頃から聞いているというのはありがたいことで、「そういうもの」として疑いなく受け入れられた価値観が自分の中に根づいているので、この教えを窮屈に感じたことはありません。我が家の子どもたちにも、「100 円のおこづかいなら 10 円は神様のものだよ」と教えています。什一献金というのは、(今の私の理解では)人生を自分のものとして握りしめていた罪人が、本来の主人である神にお返ししたことの証であると思うのです。今まで知らずに「神のもの」まで「自分のもの」としてきた

¹ もっとも、この割合は必ずしもイスラエル固有のものとも言えず、ヘロドトスの『歴史』(紀元前 5 世紀)の中にも出てくるようです。

人が、本来お返しすべき分を神にささげ、神に自由に用いていただけるようになった。実は、そこには自由がある。経済に束縛されない自由。そして、ささげた以上に神が与えてくださることを信じる自由です。教会でお金の話をするのはいやらしいことでしょうか。いいえ、これは私たちの信仰生活と最も深く結びついた側面であり、避けて通ることはできないのです。私たちは神よりも自分を優先しようと思えば、どこまででもそれができてしまう。神への感謝を忘れたイスラエルが真っ先に陥ったのは、献げ物を怠るということでした。

人は神のものを盗むことができようか。ところが、あなたがたはわたしのものを盗んでい
る。しかも、あなたがたは言う。『どのようにして、私たちはあなたのものを盗んだでしょ
うか。』それは、十分の一と奉納物によってである。(マラキ3:8)

献金は「献げ物」である以上、各々の自由意志によって金額が定められ、主の御前にさ
さげられます。「神とその人」との間には誰も立つことはできません。それだけに、私
たちは祈りの中で主の御声を聞かなくてはならないのです。

さて、第一世紀のユダヤ教では、この献げ物が滞りなくささげられるために（神への
不正が生じないように）、あらかじめ規定として細かに収入（収穫）の十分の一が定め
られていました。それはそれで「間違いのない方針」なのですが、気をつけなくては各
人の自由意志を超え、強制力をもって民衆を縛るものともなりかねません。律法学者た
ちは、実際にはモーセ律法に記されていない「はっか、いのんど、クミン」といった香辛
料にまで、その収穫の十分の一をささげるよう決めました。

主イエスは彼らの定めた規定そのものを否定しているのではありません。その規定が
一人歩きし、神が真に求めておられる精神「正義とあわれみと誠実」が忘れられている
ことが問題とされているのです²。「献げ物」が「外面的な義」であるならば、「正義と
憐れみと誠実」は「内面的な義」です。神の順序は常に内から外であり、神との交わり
から出る喜びによって、献げ物は溢れてくるものでなくてはなりません。しかし、規定
として外堀を埋められてしまいますと、献金は「苦しみ」になるのです。一番よくない
のは、喜びが欠如し、嫌々ながらささげるという姿勢でしょう。それは献げる人自身に
とっても良くないばかりか、神もお喜びにならないものとなる。これは宗教生活「ある
ある」の倒錯であり、本質を失った宗教行為です。主イエスは、民衆の心をそのように
縛り、彼らから「献げる喜び」を取り去った律法学者たちに「災いなるかな」と宣べて
いる。そして、怖いことに、彼らはそのようにしながら、自分は神に対して忠実だと「思

² 「正義」…弱い者を守るための律法を正しく取り扱うこと
「あわれみ」…罪や弱さをもつ人間に対し深い同情心をもつこと
「誠実」…どのような状況になっても変わらず信頼できる姿（中澤《下》 p. 310）

い違い」をしていたのです。

目の見えぬ手引きども。ぶよは、こして除くが、らくだは飲み込んでいます。(23:24)

ぶよは最も小さい生き物の代表。らくだは最も大きな生き物の代表です。これは比喻で、律法の細かい規定は重箱の隅を突つくようにして守ろうとするが、肝心な「律法の心」が失われていることを伝えています。ぶどう酒を醸造する時にたかるぶよを取り除けるために、フィルターで濾す。「汚れたくない」という思いがそうさせる。そのように、「汚れた人」とは一切関わろうとしない態度や、罪を犯した人に悔い改めの道を教えないうことが、まったく神の御心に反していることを主は指摘しているのです。

本論2. 容器の内と外／白く塗った墓

わざわざいだ。偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは杯や皿の外側はきよめるが、その中は強奪と放縦でいっぱいです。目の見えぬパリサイ人たち。まず、杯の内側をきよめなさい。そうすれば、外側もきよくなります。(23:25-26)

25 節以下も同じことが言われている。「杯や皿の外側はきよめる」とありますが、これは食前の浄めの儀式で、やはり「汚れを受けまい」とする彼らの潔癖の現れです。しかし、人間はどんなに外をきれいにしても、それで心がきれいになる訳ではありません。

私は高校時代、同級生のファッションに衝撃を受けたことがあります。私などはその辺のスーパーで買った服を着ていたのですが、都内での遊びに誘われて行ってみると、皆さん本当にお洒落なのです。「そんな服どこで買うのか。いったい幾らするのか」と訊くと、次々と聞いたこともないブランド名が出てくる。全身で数十万円だという話を聞いて、カルチャーショックを受けたものです。ファッションがくだらないと言っているわけではありません。田舎臭い私の服装を馬鹿にする彼らの態度、延々と続くクラスメートの悪口、不品行の話に違和感を覚えたのです。内面と外面がちぐはぐに感じた。

「その中は強奪と放縦でいっぱい」だと言われます。宗教指導者とも言える人々がいったい何を行っていたのかは分かりません。「強奪」という言葉は「欲望の実現」と関わりがあり、「放縦」という言葉は「欲望に翻弄されている姿」と関わりがあります。主イエスが見抜かれたのは、彼らが民衆から搾り取る「献げ物」が、神のものではなく、彼らの利益になるように使われていたという事実でしょう。

わざわざいだ。偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは白く塗った墓のようなものです。墓はその外側は美しく見えても、内側は、死人の骨や、あらゆる汚れたものがいっぱいです。そのように、おまえたちも外側は人に正しく見えても、内側は偽善と不法でいっぱいです。(23:27-28)

ここでも言われていることは基本的に同じです。「白く塗った墓」という変わった表現があります。墓は汚れたものと考えられていました。律法の規定に基づき、墓場に足を踏み入れる人は汚れた者と見なされ、^{きよ}浄めが必要とされました（民数 19:18）。過越の祭の時には巡礼者が間違っ^てて墓場に入らないように、敢えて目立たせるため、墓が石灰で白く塗られたのです。主はこの習慣を取り上げ、宗教指導者たちの実態とはそのようなものだと言われる。墓はいくら白く塗っても本来汚れているものではないか。墓の中には虫がおり、普段手入れするものではないから汚れているのではないかと。それと同じように、宗教的に表面ばかり飾っても、それは虚飾でしかない。神との関係が死んでいたら、そこには命がなく、まさに「墓」のようなものではないかと。

私たちはこの箇所を「^{ひとごと}他人事」として読むことはできません。私たちは自分の霊的状态をよく見極めなくてはならない。「根本原則は、自己を直視し、自己を吟味することである」（ロイドジョンズ p. 35）。「私たちは自分自身を知っているだろうか。自分に特有の危険をわきまえているだろうか。また特に陥りやすい誘惑を承知しているだろうか」（p. 25）。「霊的スランプ」に陥らない人はいないでしょう。しかし、その状態に留まり続けることは誰にとっても良いことではありません。それはつらいことであり、信仰を証しすることを困難にさせるからです。私たちが礼拝に臨むとき、そこには喜びがあるか。礼拝が単なる義務感や習慣で続けられてはいないか。神に招かれ、会いに行くというとても特権を胸に礼拝堂の門を開いているか。献金はどんな気持ちでささげているか。パウロはクリスチャンの献金の姿勢について「ひとりひとり、いやいやながらでなく、強いられてでもなく、心で決めたとおりにしなさい。神は喜んで与える人を愛してくださいませ」（Ⅱコリント 9:7）と教えています。私たちは今一度、神と自分との関係を見つめ直し、そこに豊かな愛の交わりを求めていきたいと思うのです。

【結論】

最後に、「内をきよめる」ということは、人間ができることではありません。人間は全的に墮落しており、如何なる力によっても、努力によっても、自らをきよめることはできないのです。では、何が必要なのか。それは聖霊の介入であります。神の霊が私に働き、私を満たし、神との真実なる交わりへと導いてくださることを求めて祈るところから始めなくてはなりません。そして、私たちはこの方が自分に語り給うことにのみ耳を傾ける必要があります。その意味で一日のスタートは大切です。

「朝、目覚める時に浮かんでくる思いを取り上げてみよう。あなたがその源ではないのに、その思いが語り始め、きのうの問題などを持ち出してくる。だれかが語っている。

だれがあなたに語りかけるのだろうか。語っているのは、あなたの自己なのである。それに対して、この詩篇（※42 篇）作者の対処法はどうだろうか。彼は自己が語るのを許さず、彼の方から自己に語りかけている。『わがたましいよ。なぜ、おまえは絶望しているのか』と問いかけている。彼のたましいは彼を抑圧し、意気消沈させていた。そこで彼はきっぱりと、『自己よ、しばらく耳を傾けよ。私がおまえに語る番だ』と宣言する。」（ロイドジョンズ p. 30-31）

私たちは日々聖霊に満たされなくてはなりません。起きて最初に見るものは何か。それは御言葉であることが望ましいでしょう。ネットニュースやメールチェックをする前にです。どんな日にも、神との関係を確立させてからその日をスタートし、聖霊に満たされた生活を目指したいと思います。「内から外へ」湧き出る喜びと平安が、そのまま証となるのですから。

【祈り】

主よ、私たちが第一としているものとは何でしょうか。一日の最初に聞く言葉は何でしょうか。今一度自分の生活を見直します。私たちがまず見るものが聖書の言葉であり、聞くものがあなたの御声であることを願います。あまりに多くの情報が世に溢れています。それらに翻弄される時代です。私たちが聞くべきもの、聞き従うべきものを、どんな時にも見失うことがないようにお守りください。そのために、日々私たちを聖霊で満たしてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

人に命を与え、その人生の主となり給う、父なる神の愛。

宗教に本質を求め、神と人との生き生きとした関係へと導き給う、主イエス・キリストの恵み。

各々が第一としているものを見直させ、日々神の御心を示し給う、聖霊の親しき交わりが、

我ら一同と共に、とこしえにあらんことを。